

## LUI「公募研究」成果報告書

研究課題（和文）：アメリカ占領期日本(1945-1952)における軍と性の関係についての社会史的研究

研究課題（英文）：Social History of Military Sex in the Occupied Japan, 1945-1952

申請者名・所属先：岡田泰平（総合文化研究科）  
海外招聘者名：なし

### 1. 研究の目的

本研究の目的は、占領期日本本土の米兵による性暴力事例等を検討し、米軍—売春—性暴力の関係を認識および制度の面から明らかにすることであった。具体的にいえば、学術的背景としては、日本軍「慰安婦」問題の学知としての発展、がある。日本軍「慰安婦」制度下の性支配が、どのような点においてアメリカ占領下の売春制度に継承されたのか、を問うことであった。

### 2. 研究開始当初の背景

もっとも上記の問いには疑義があろう。軍の関与の仕方においても、「強制性」や「記憶」のあり方についても、両者には大きな違いがある。しかしそれにも関わらず、両者は、①広範に展開する制度的売春、②制度的売春にも関わらず頻発するレイプ等の性暴力、という点を共有している。この点から、日米両軍の性支配には継続性があり、その関係の検討が求められる。科研「フィリピン・セブおよびボホールにおける戦時性暴力とその記憶をめぐる地域史的研究」では、フィリピンにおける米軍による日本軍性暴力の訴追を検討し、本研究では、占領地日本を対象に逆に米軍の性暴力を浮き彫りにした。このことによって、軍による性支配の継続と断絶の側面を明らかにした。

### 3. 研究の方法

この課題には、人種・記憶・性支配からの考察が求められると考えた。拙稿1（「占領地日本のセックス・ワーカーについて——語りと曖昧さをめぐる考察」日比野啓、下河辺美知子編『アメリカン・レイバー：合衆国における労働の文化表象』彩流社、2017年）によると、

米軍による人種・性差別は明らかだが、日本人の側にも性犯罪を黒人性に結びつけるという人種認識の問題があった。また1949年ごろまでも米兵による著しい性犯罪が東京近辺でも生じている。しかし、これら性暴力の記憶はほぼ封印されてきた。さらに、占領地において軍の政策が作りだす、性にまつわるミクロな権力関係がある。これも拙稿2（「日本軍「慰安婦」制度と性暴力—強制性と合法性をめぐる葛藤—」上野千鶴子・蘭信三・平井和子編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店、2017年）で検討したように、「慰安婦」・売春制度を合法とする占領者の認識上および制度的な権力の問題が考察されなければならないと考えた。

このような一連の疑問に答えるために、以下の調査を行なった。

- ① 米第八軍・第六軍資料から、性暴力事件を明白にした。
- ② 拙稿2では良く知られた作家のアメリカ文学作品を検討したが、この公募研究では日本駐屯経験に基づくマイナー文学作品を検討した。
- ③ 性・事件に関する新聞・雑誌記事、行政文書、検閲文書等、占領期日本語資料にあたりたい。また当該地域住民の聞き取りも行なった。さらには、性の問題が1950年代の反基地闘争にどのように継承されたのかも調査した。

### 4. 研究成果

第4回 HMC オープンセミナー

- 題目：戦時・占領時の性を問う—先行研究から見るフィリピン関係資料
- 日時：2018年11月9日（金）17:00-19:00
- 場所：東京大学東洋文化研究所 第一会議室
- 報告者：岡田泰平（総合文化研究科・准教授）

概要：近年の戦争と性暴力の議論においては、往々にして「記憶の政治」が論じられる。その背景には、性暴力が現実政治における謝罪や補償の問題につながりやすいことや、内実を示す一次資料が不足していること等が挙げられよう。本発表においては、「記憶の政治」と

は一線を画し、あくまでも現存している一次資料、地方史、回顧録などからフィリピン・セブ島における3ないしは4の事例を実証し、日本軍占領下セブ島における性暴力の多様性と重層性を示した。そうした上で、課題研究である米軍占領下日本における性暴力についての研究状況と資料について論じた。とりわけ質疑応答等で資料と事件史の関係について考察を深められた。

#### 第10回 HMC オープンセミナー

- 題目：日本占領期の性—米兵の残した文学作品から
- 日時：2019年4月26日(金)17:00-19:00
- 場所：東京大学 伊藤国際学術研究センター
- 報告者：岡田泰平(総合文化研究科・准教授)

概要：本セミナーにおいては、おおむね1950年代に公表されたアメリカ文学における日本占領期を対象とした作品を読み解くことにより、占領と性の問題を探求した。その多くは、いわゆるパルプ・フィクション(低俗な大衆小説)であり、男性読者を対象としたものである。また作品内の性関係は、ほぼ例外なく異性間で生じている。

第一の関心は、文学作品における描き方の連続性に係る問題であった。日本人、他のアジア系、白人の女性の表象は、極めて典型的に描かれており、それぞれの類型がどの文学作品から始まり、その後どのように展開していったのかという系譜を辿った。とりわけ発話により自らの意思を示すという主体性が、どの作品でどのように日本人女性に付与されていたのか、について言及した。

第二には、第一の関心の延長として、ごく一部の例外を除いて男性によって書かれ男性によって読まれるこれら文学作品の中での、性暴力の正当化の問題に注目した。すでに先行研究によって、占領下においては様々な性関係があり、なおかつそれら性関係が占領軍によって多様な介入を受けてきたことが明らかにされている。そこでは、どのような性関係が暴力的であるのかという問いが考察されているのだが、何が暴力的であるのかという問い

と、何が正当化されるのかという問いは互いに入り組んだ関係を持っており、この入り組んだ関係を前提として考察した。また1950年代～60年代にかけては、白人男性とアジア系女性の結婚が、アメリカ本土において許容されていく時期と重なるが、このようなより大きな歴史的背景の中での表象の変遷にも注目した。

そして第三には、日本軍によるフィリピン占領下の性関係を対象とした文学作品と対比させることにより、異なる軍と異なる場の事例から、占領と性の関係についてより一般的な考察を行なった。前回のセミナーでは、フィリピン・セブ島での性暴力を裁判記録や軍関係の文書から論じたが、当該の状況については文学作品も発表されてきた。それら文学作品の一部と、上述のアメリカ文学作品を比較し、共通する点と違いを明らかにした。その上で、性をめぐる文学上の表象の探究が、歴史上の性暴力の認識に対してどのような貢献をなしているのかを論じた。

#### 5. 主な発表論文等

〔図書〕

「植民地主義と向き合う——過ぎ去らない帝国の遺産」東京大学教養学部歴史学部会編『歴史学の思考法』95-112頁、岩波書店、2020年4月

〔雑誌論文〕

(書評論文)「末廣昭『タイ 中進国の模索』——東南アジアの社会——」『歴史評論』829号(特集 新書から広がる歴史学) 57～64頁、歴史科学協議会、2019年5月

〔学会発表〕

「フィリピン・ビザヤ地方における日本軍による性暴力」『日帝強制動員の国際比較—韓・中・日・ミャンマー・フィリピン・インドネシアを中心に—』日帝強制動員被害者支援財団、ソウル、韓国、2020年5月28日(コロナ禍により、パーパー提出及びコメントで対応)

"Recapturing War Zones in Comparison: Leyte and Central Visayas," National

Conference on the 75th Anniversary of the  
1944 Leyte Landings, The National  
Historical Commission of the Philippines,  
Leyte Normal University, Tacloban, Leyte,  
the Philippines, 2019年10月17日～10月  
19日

〔その他〕

（書評）「早瀬晋三著『グローバル化する靖国  
問題：東南アジアからの問い』『同時代史研  
究』12号、2019、95～99頁

（書評）宇田川幸大「考証 東京裁判」『赤旗』  
2019年3月24日、8頁